

IAML-IAMIC-IMS Conference June 18-23 2006 in  
Göteborg 報告

荒川恒子（支部長）

スウェーデンの南西に位置する港町で、この国第2の都市ヨーテボリ（エーテボリ、イェーテボリ等と表記される場合があることからもお分かりいただけるでしょうが、スウェーデン語の発音は日本人にとっては非常に難しいです）で開催された会議は、400名近い参加者を得て盛会の内に、幕を閉じました。今回はIAMIC（国際音楽情報センター協会）とIMS（国際音楽学会）の共催で行われました。IAMLは1951年にユネスコの支援を得て正式に発足しました。国際音楽学会と連携して、音楽資料の取り扱いに関する情報交換と所在目録作成事業等を行う国際機関を目指す旨が、ホームページに明記されています。それにも関わらずIMSとの共催は初めてのこと。今回もイニシヤティブはIAMLがとったであろうことは、参加者の顔ぶれから察せられることです。しかし共催した3団体の関係は非常に友好的で、日頃から互いに助け合い、協力して仕事をすべきであることを認識しあっていることがわかります。事実それぞれの団体が主催で、毎日1時間半を一区切りに5-6のセッションが同時進行で行われたのですが、参加者達は自分の所属団体とは必ずしも関係なく、それらの間を自由に行き来して、情報を共有しあっていました。そんな今大会の性格もあるのかもしれませんが、日本からは IAML およびIMSの会員である金澤正剛、樋口隆一両氏、および荒川恒子、IAML会員の藤堂雍子、伊藤真理両氏、そしてIMSの会員である福中冬子氏が参加しました。なお福中さんは20世紀の新しいオペラ観をリルム Rilm とラッヒェンマン Lachenmann を例として、発表されました。また大会参加後はIAMLの会員としても活動して下さるようになっていきます。

ヨーテボリはその中心部なら、ほとんどどこへでも歩いて行ける程度の規模の町です。中央駅から多少だらだと坂を上っていくと、会場である音楽大学（Artisten）に到ります。その周辺には公共の図書館、美術館、演奏会場等がまとまっています。また周囲には公園や池といった散歩や憩いの場も多く、こじんまりとはしていても素晴ら

しい環境の中で勉学に励むことができそうです。Artisten自体にも図書館、コンサート・ホール、オルガンが設置されたかなり広めの部屋、劇場と名付けられ照明等の設備の整った部屋がふたつ、その他大小の講義室やたぶん練習やレッスンのための部屋、簡単なカフェテリアと中庭等があり、全体として構想され建造された建物であることがわかります。

3年前に初めてIAMLの会議に参加した時は、語学力の不足ということも勿論ありますが、どのセッションを覗いてみるのが面白いのかさえ、見当が付きませんでした。利用者としてのみ図書館と関わる私には、その内側でどのような議論や工夫がこらされているのかよくわからなかったのです。しかし何度となく継続して発表されるプロジェクトが、今年はどのような成果を挙げたのか気になる点も出てきて、回数を重ねて参加することにより、自分の参加したいセッションに対して、自然と見極めができてきたようです。まず月曜日の注目点はスウェーデンのウプサラ大学所蔵の「デューベン・コレクション」の整理と公開の模様です。このコレクションはストックホルム宮廷楽長であると同時に、ドイツ教会聖ゲルトロートのオルガニストであったグスタフ・デューベン（1628頃-1690）が収集し、自らが中心となり仲間をつのって筆写したもので、バロック時代の宗教的声楽作品に関する3大コレクションのひとつといわれています。筆者もカンタータ研究にあたって、しばしば楽譜のコピーをお願いし、質問にお答えいただき、ウプサラ大学のスムーズな対応に感謝していました。その反面このコレクションの全容を解明する研究がなされていないのを心配もしていました。しかし1988年から発表者 Erik Kjellberg により始められたプロジェクトは、整理方法の検討のため、あるいは経済的困難によりしばしば中断の憂き目にあったそうですが、標準的なデータベースをはるかに凌ぐ詳細な内容を作成し、今秋からインターネット上で閲覧できる見通しとなったそうです。私にとってはよだれがでそうな吉報です。フランスのGallicaも健在振りを示してくれました。ルイ14世に仕える音楽家、司書であったA. D. フィリドールの写譜した、いわゆるフィリドール・コレクションのデジタル化と公開は2001年から始められています。今までにパリ国立図書館所蔵のものが公開されま

した。しかし2005-2006年にはフィリドール工房で写譜され、いわゆるトゥールーズ・フィリドール・コレクションと呼ばれるものにも手を広げ、さらにはヴェルサイユ市立図書館とも提携して、プロジェクトの成長と拡大をはかるのであります。 <http://gallica.bnf.fr> をご覧になって下さい。フランクフルト・アム・マイン大学図書館はマンズコプフ Fr. N. Manskopf (1869-1928) ・ポートレート・コレクションを所有しています。これは音楽、演劇、舞踏、文学等の分野に関わる肖像画、舞台画、建造物の画像、寓意絵等を含み、特にフランクフルトの音楽生活、リヒャルト・シュトラウスと彼の作品にまつわる重要な資料だそうです。 <http://manskopf.ub.uni-frankfurt.de/> あるいは <http://ibsopac.rz.uni-frankfurt.de/> からアプローチすることができます。A.ワトケンスは1894-1918年まで、ブリュッセルの王立コンセルヴァトワールの司書を勤めましたが、音楽学研究において、リブレットが重要な意味を持つことを認識していた音楽学者のひとりでした。そこで彼は17世紀のイタリアのリブレットを収集し、そのカタログを出版しました。しかし後継者がその重要性を等閑視したため、約6,000点におよぶそれらは長い眠りにつきました。目下ドニゼッティ・コレクションから始めて、これらのリブレットをデジタル化して、インターネットで全文を読めるように作業を行なっているそうです。また展示室では、ケルンの応用音楽学・心理学研究所がウィーンの市立図書館および音楽学研究所と連携して作成した、シューベルトの自筆譜のデジタルがデモンストレーションされていました。 <http://www.schubert-online.at/> です。これもお試しください。

火曜日の朝にはRIPM（国際音楽記事総覧及び記事索引）プロジェクトの25周年を祝って、感謝とおめでとうの言葉がIAML、IMSまた他のRプロジェクトの責任者達から贈られました。まさにこの間に13ヶ国語で書かれた500,000以上のデータベースが200巻に及び出版され、音楽定期行物のRIPMオンライン・アーカイヴのデモンストレーションがなされたそうです。続々と惜しげもなく研究のための資料が整理、公開され、そのための地道な努力がなされている現状を知ると頭がさがると共に、何もしていない自分には居場所がないという心地悪さも感じます。しかしRISMのセッションに出席した時、日本でもリサーチ図書館部門を持つ国立音楽大学と接触し、貴重で質の高いデータを受け取っているという報告をいただき、ほんのちょっと嬉しくなりました。なお私は日本支部の活動状況についての報告をいたしました。英語のホームページを開くこと、できることからRISM情報を世界に公表し、日本のRISM所有者や協会、団体に整理、公表の必要性を理解していただく努力を続けていきたい旨をお話いたし

ました。また私にできるほんの一步として、日本の出版物を展示会場のブースにおかせていただきました。太田記念美術館の浮世絵展のカタログ、アカデミア・ミュージックの協力をいただいた4冊の本とそれらのちらしです。筆者が代表を務める「バロック音楽研究会」編の『教会カンタータの成立と展開 -Studies of Baroque Music through Church Cantatas in Germany』、久保田慶一さんの英語版のエマヌエル・バッハ研究『C. P. E. Bach A Study of His Revisions and Arrangements』、徳丸吉彦さんの『Musics, signs and intertextuality』、Hugh de Ferranti/Yoko Narazaki ed. の『A Way a Lone: Writings on Toru Takemitsu』です。それらの紹介を誰よりも喜んでくださったのは藤本里子さんです。彼女はルネサンスとバロック・ダンス研究のためにヨーロッパに渡り、スウェーデン人のリュート奏者と結婚なさいました。今はヨーテボリ大学で日本語を教えたり、Mvsica Rediviva というCD制作に携わっておられます。一枚一枚丁寧に制作されたCDの展示と販売、また私達の勝手なお願いに応じて、友人たちからスウェーデンの地に根ざしたCDを借り受けてきて、販売して下さったりしました。主として音楽を通してですが、スウェーデンと日本の文化の交流に重要な働きをなさっておられます。上記の書物は彼女に託して、日本のことをお知らせするためにお使いいただくこととしました。

IAMLの会議に素晴らしい文化的行事はつきものです。今年も私を楽しませてくれる趣向が沢山盛り込まれていました。しかしスウェーデン、特にヨーテボリといったらオルガンについて語らないわけにはいきません。水曜日の午後の遠足に、私はオルガン見学を選びました。初めは音楽大学のホールに設置された2台のオルガンです。1650年頃のポジティブ・オルガン（ニュルンベルクのManderscheidt 製作）、そして1998年にオランダのVerschueren Orgelbouw により建設されたフランスのシンフォニック・オルガンの説明とデモンストレーションでした。このオルガンは音楽大学のオルガン科の学生の学習のために用いられるものなのです。したがってどのようなオルガンを購入すべきか、その決断には非常に難しいものがあったそうです。どのようなレパートリーでも一応こなせる便利なオルガンにすべきか、特別な個性を持ち、ある種の様式の作品を演奏するために妥協を許さないものにすべきか、ということです。大学では後者の案を採用しました。その後17世紀北ドイツのオルガン、18世紀のスウェーデンのクラシカル・オルガン、あるいは19世紀のフランスのシンフォニック・オルガンの名工Cavaille-Coll (1811-1899) のオルガンが最終選考に残ったのです。しかしこのオルガン製作の伝統は消え

ています。そこで少なくともこのオルガンのサウンドスケープを知り、またこのオルガンの修復を行ったことのあるオランダの製作者に建造を依頼したことです。この大きなオルガンに対して、ホールは多少小さい気がしました。しかし響きを聞いているとこの楽器の音の美しさにうっとりとしてしまいました。楽器をいれる器、すなわち建物の建築にも注意が行き届いていたのです。一見何の変哲もない木造建築のようにみえますが、床のフローリングはセメントの上に直になされるのではなく、その間には砂が敷かれています。壁も中に漆喰の内壁があり、セメントの外壁との間に弾性ゴムが入っているそうです。天井も歴史的建造物をモデルとし、それを今日の現代的な建物と調和させるように工夫したそうです。このように音楽的に全体の調和を図るということは、スウェーデンの他の教会、演奏会場の響きすべてに見られることでした。外観はどうということはないのに、何とも快い音に絶えず感動を禁じえませんでした。大学を後にしてOrgryte nya kyrka 教会ではHenry Willis オルガン (1871)、そしてヨーテボリ大学オルガン・アート・センターの研究の成果として2000年に献納された北ドイツ・バロック・オルガンを聞かせていただきました。なおこの教会では木曜日の夜に、このバロック・オルガンを使用してデューベン・コレクション中の作品が演奏されました。私は作品研究をしているにも関わらず響きとして聞いたことなかったV. アルブリーチ (1631-1690/96) の声楽曲、D. ブクステフーデ (1637-1707) のオルガン作品等を楽しみました。オルガンの置かれているバルコニーあるいはその両サイドのバルコニーの上から奏でられる歌、ヴァイオリン、サクソフォンの響きはまさに調和して教会を満たしました。ここでもこのオルガンの建造が決定した時に、その楽器がふさわしく用いられるように、教会の建物自体も改築してサイド・バルコニーを付け加えたことなのです。森と湖のほとりに建てられ、今は大学の迎賓館あるいは会合の時に用いられるJonsered Manorでお茶をいただいた後、当地の小さい教会に設置された、これも状態の良いPehr Schiörlin オルガン (1783) の音を楽しみ、最後はオルガン・リサーチ工房での仕事振りを見学しました。当日はおいでになりませんでした。ここでは横田宗隆さんが、パイプの調整の専門家として働いておられるのです。これだけでも十分満足なのですが、藤本里子さんが横田さん夫妻および日本のオルガニスト今井奈緒さんと共に制作した素敵なCDがMvsica Rediviva (<http://www.mred.nu>) から発売されていますので、御紹介しましょう。中部スウェーデンを東から西へと1600kmも走り回り、9つのオルガンを試した後7つを選んで聴かせてくれます。大きなオルガンもありますが、全体としては「農民のオルガン

・・・。一つ一つに個性があるが、全体として音は田舎の人間臭さや暖かさ、そしてそれに伴う気品が残っている」と里子さんがブックレットに書いておられます。彼女は長い間スウェーデンに住み、感じたこの国の人々の気質を私に教えてくださいましたが、それを自分も共感しようとするならば、この一枚のCDと触れ合うと良い、と思います。

会議後のストックホルム、ウプサラ旅行にも参加しました。首都ストックホルムは多くの小島を船や橋で結ぶ美しい都です。まず最初の見学場所はドロットニングホルムDrottningholmのバロック劇場です。これは特に演劇やオペラ好きの王妃ウルリカ Lovisa Ulrika のための希望で1762年8月、彼女の名の日に柿落しされたそうです。しかしオペラ上演の最中に火災、全焼してしまいました。それにもかかわらず「北のミネルヴァ」と称されたい王妃の情熱は衰えをみせず、1766年6月12日に再建されたのが、今日ほぼ当時のままの姿で残されている当劇場です。財政難の中での工夫は、本物の資材を用いるのではなく、壁等にも絵で必要な模様を描くという方法を取らせています。多くの舞台絵、機械仕掛けが今日でも使用可能な状態で残されています。本で調べた限りでは実感が湧かなかったバロック劇場を目の当たりにしたのは大きな感激でした。宮廷からの帰り道は船旅です。ピュッフェのサービスを受けながら、大都会を船上から眺めるのも一興です。次に近代的な建物へ引越しつつあるスウェーデン音楽図書館を見学しました。ここには1500-1800年の多くのマヌスクリプト、特にスウェーデンの中心的な作曲家のものが収められ、ヨーロッパ有数のリサーチ図書館としての役割を果たしています。しかしその一方で、一般の人々へのサービスにも怠りなく、クラシック音楽、吹奏楽、ジャズ等の楽譜、音楽図書や事典類も閲覧しやすいように整理されていました。またスウェーデン音楽史と音楽生活のドキュメンテーション・センターとしての機能も担っているのです。大きな台所のついた談話室のような所で、また飲み物のサービス等を受け、働きやすそうな環境作りをうらやましさを禁じえませんでした。最後の日はおこがれのウプサラ大学図書館見学です。医学、動植物学等の学部で有名な大学です。17世紀初頭に人体解剖を学ぶために建設された教室や珍しい宝物、植物園等を炎天下にも関わらず熱心に見学しました。音楽に関わってですがデューベン・コレクションは管理の行き届いた部屋に置かれているそうです。しかし図書館の展示室にはむき出しで、平行オルガヌムの美しい楽譜や、コレクションの一部が置かれ、まさに贅沢な一瞬でした。それらの中には音源がつけられたものもあり、熱心な説明や質問に対する応答をいただきました。まことに見

事な美しさ、しかしよく管理され実際に機能している図書館でした。

会議の週末は夏至にあたっていました。スウェーデンは夏至を国民の休日とする国なのです。短い夏はあっという間に過ぎていくことでしょう。帰国する月曜日にヨーテボリ駅前の庭園公園をもう一度散策しました。素晴らしい配色で薔薇が植えられているのです。この日は早朝から、多くの人々が庭園の手入れをしていました。欲張ること少なく、持てるものを大切に、自分を過大評価することなく、自然と共存しながら地味に生活する人々と多く出会いました、と言っていた里子さんの言葉を思い出しました。一生行けると思っていなかったウブサラの素晴らしい図書館を訪問できたことは喜びでした。しかしスウェーデンの人々の生活振りにちょっとでも触れることができたのは、私にとってはもっと大きな収穫だったのかもしれない。

## IAML GÖTEBORG 2006

### 藤堂雍子（副支部長）

ストックホルムの西南、デンマークに向かいあった港町ヨーテボリは、スウェーデン第二の都市、オペラハウスが建設中と教えてくれたのは確かサン・セバスティアン会議（1998年）で同宿だった北欧メンバーからで、そのオペラハウスと新しい見晴らし塔が港に面して「リップスティック」状に建ち、その近くには海にそのまま浮かんだサブマリンも含めた船の博物館が在る。昔、港に入る船の目印となるマストフッグ教会とクリスチャン教会が港に近い旧市街にひときわ高く聳えているのが、町の南側の国立美術館のある文教地区の丘からも見える。街をほぼ東西に運河が二本流れ、その周辺はグリーンベルトだったり、昔ながらのカフェやパブレストランも並んでいる。国立美術館の裏手にヨーテボリ大学があり、音楽&演劇学校（Artisten：住所はFagelsange 1 i.e. 鳥の歌1番地）もその一角、側らの美しい沼地の周辺には花々が咲き、チューダー様式と覚しき建物も垣間見え、イギリス風でもある。新しい白木を沢山使った居心地良さと暖かさを感じさせる校舎、光を一杯取り入れた気持ちのよい建物が今回の会議場だった。エントランスに近い図書館が会議のための事務所になっていて、メールチェックや情報検索、レポートの最後の手直しもできるパソコンが閲覧室のあちこち点在し、いつも列ができ、待ち合わせや打ち合わせは同じ一階の広いカフェテリアに続くラウンジや中庭でも十分可能。ホールが大小同じフロアにあり、上階には長い登

り階段から眺められる赤いフレームの小窓単位で研究室が並び、各種のレッスン室や教室もある恵まれた環境。



photo by Michel Fingerhut

ヨータ広場からヨーテボリ市街を望む

18日（日）午後からのカOUNシル（役員会）は昨年の大会から今年にかけての総括から始まった。IMCロスアンジェルス会議での南米情報、スペイン支部長を長く務め、先頃急逝したJ. クレスピの記念式参列の模様、AMADEUSプロジェクト進捗、来年9月創立140周年を迎えるモスクワ音楽院が主催する2日間の国際会議の案内、ラテン諸国のためのIAMLサイトForo LatinoaméricaをJ. バークが展開中であること（[http://www.iaml.info/en/foro\\_latinoamerica](http://www.iaml.info/en/foro_latinoamerica)）などを会長が報告。事務長は来年のシドニー大会での改選について明らかにした。会長候補には現会計のM. セヴェール、副会長には、J. バーク（スペイン）、Ch. バンクス（英）、J. P. カッサロ（米国）、M. フィンガーフット（仏）、G. オーリッカ（エストニア）ら順当と思われる候補が既に挙がっている。支部のメンバー数からみれば日本からもそろそろ副会長候補が出て良いし、会議開催地に名乗りを挙げないかとの打診は毎年あることを銘記しておこう（受けて立つだけの基盤確保が必要なことは言うまでもない）。会計からは会費値上げをテーブルに載せざるを得ない見通しが出された。遅滞の続いている機関誌発行予定、RISM委員会の改組案も非公式に話題提供された。

夕方から同（Artisten）ホールでオープニング。IMS、MICとの合同の会議とあって、各会長が勢揃いし、日本からは、金澤正剛、樋口隆一各氏と筆者もここで集合。月曜日には荒川恒子、伊藤真理両氏、木曜に発表を抱えて登場された福中冬子氏を加え総勢6名の会議参加となった。全員がIAMLのメンバーであり（福中氏は帰国後入会）、

IMSメンバーと兼ねての出席が多勢。オープニングの北欧の現代作曲家たちの作品を紹介した J. Yngwe 率いる ProMusica 室内合唱団は、参加者の気持ちの一つにする歌いこまれた見事なアンサンブルだった。電子化だけでなく、魅力的なタイトルが並ぶ今年のプログラムは、機中でもチェックしてきたが、自分がどのセッションを聴くべきか選ぶことが難しいと予想された。以下は出席できたセッションの抄録にすぎない。



photo by prof. Kanazawa

Artisten 内庭で歓談

現会計で次期会長候補 M.Sevrt、樋口隆一氏、事務長 R. Fluly と筆者

19日(月) インフォメーション・セッション は、最新トピックスを並べることが主眼だ。MIC会長の「現代音楽の位置と今日の図書館における効能」と題したスピーチは実例を聴きながら、ポピュラー音楽の隆盛の側ら役割が減じていることへの警告と、楽譜が演奏されることの重要性を下支えする役割を図書館が担っていることを挙げ協同することの意味を戦術的に述べ、それは図書館活性に繋がることを指摘した。

音楽学校図書館近況が、英国王立音楽院、ジュリアード、パリ音楽院、リヨン音楽院から報告され、これは教育密着型の傾向が強くなっていることを視させた。

午前後半は、IAMLプログラム委員会とIMSの合同セッション「作曲家とコレクション」で、まず、ヴィーン、ヨーゼフ広場に近いモラルド宮に、昨年12月に移転したばかりのオーストリア国立図書館音楽部門情報が Th. レイボニッツより明らかにされた<sup>1</sup>。1920年以降昨年まで王宮の中で点在していた資料が遂にまとまって一つの建物に収監されたという。IAMLにもこの6-7年前まで、IASA、MIC以外のメンバーがオーストリアか

ら出て来なかった背景には、あれだけの歴史的遺産を有しながら近代的図書館の管理体制が整わずにいたということなのであろうか。オンラインデジタル化はまだ始まったばかりらしいことも判る。サービスが集中化することが今後徐々に期待できる。一方香港の嶺南大学が、NAXOSシステムに則ったOPACを紹介。これはもう米国のOPACそのまま。オハイオ大学の「北欧音楽アーカイヴ」の紹介もあった。

午後から、「著作権委員会1」に出席。音楽における著作権の実態を相互に把握することを主眼とした2004年のアンケートによる実態調査は、追加情報を求められ、今年も国立音大の市川啓子氏担当のMLAJ著作権委員会から、昨年のセミナーでも取り上げられた映像資料の図書館利用や、CARS(楽譜コピー問題協議会)の動きなどが報告された。国際的には用語の整理が困難な局面が多々あること、オーストラリアでは、教育用複写を無料に、という交渉が政府に対し始まっていること、ポーランドでは複写料金について出版者、著作権者、隣接著作権者の間でディスカッションが行われていること、ヨーロッパ音楽教育機関図書館連合やEUの動きなどが話題になった。

午後後半は、各国支部報告で、これはいずれ電子ニューズレターに掲載されるが、ロシアが2010年IAML開催に向けて始動していること、オーストリアのHPができたこと<sup>2</sup>、来年開催国となるオーストラリアが参加と協力を呼びかけていること、フランス支部 HPの9月リニューアルなどが注目される(日本は荒川支部長の報告参照)。

夜は国立美術館に隣接するヨーテボリ交響楽団のホームグラウンドで「現代北欧室内音楽の夕べ」。Gageegp! という現代音楽グループによる演奏。巷はスウェーデンがワールドカップに参戦するとあって賑わっていた。

20日(火)朝一番は、25周年を迎えたRIPMセッションで、各界(IMS、R-プロジェクト)からの祝辞は無論だが、創設者でもある R.コーエン座長が他の RILMを含めた同種雑誌インデックス類との違いや特徴を述べながら、オンライン化をお披露目した。彼の才腕と人脈は並々ならぬことを視させた。因みにRIPMオンラインはOCLCのFirst SearchあるいはEBSCOを介して検索可能。書誌索引の組み立て方に独自の視点を持ったきめ細かい配慮がなされ、音楽文献学を現場で教えている学者の信頼度が高いこと、その教育用ツールとして

使われていることに注目したい。索引収録誌は網羅的ではないが、コンテンツに通じ、何を分析的に抽出すべきかを研究者の立場から心得た組み立て方をしていることが強みで、今後ロシアの逐次刊行物にも範囲を拡げようとしており、さらにパオニアとしての真性発揮となることを期待させる。

午前後半は、RILM委員会のIMSとの共同公開セッションで、RILM DBの新たなフィールドと抄録、Vol. 23の刊行についてB. マッケンジーが近況解説をした後、(1) 1931年以降のC. ニールセン研究書誌の歴史とデンマーク現代作曲家研究の周辺についてコペンハーゲン王立図書館のN. クラベにより、(2) 「ドイツ全国書誌の《音楽》とRILMドイツについての概観」をプロイセン文化財団ベルリン国立音楽学研究所のS. ストラールが詳述した。ドイツに留まらずドイツ語圏音楽学が対象となる広範囲なWebサイトを含む広大な文献ソース情報で、1968年発足のRILMドイツ委員会との関係にも触れ、昨今、作曲家研究年刊なども多様で全体を把握することが困難とも云える状況を呈しているが、その情報も含めた手堅く有効な報告であったと云えよう。発表後、彼女のパワーポイントシートを求める人も多かった(私もそのひとり)。

午後は、目録委員会主催の「音楽資料のコード目録の進展：ハーモニーあるいは対位法？」でRDA (Resource Description and Access 記述とアクセス)について、S. ヴェルッチ (米) のペーパーを座長が代読解説することから始まった。RDAは、AACR2に代わるWeb時代の記述目録及び標目設定に代わる規則をめざし、Anglo - Americanではなく国際的にも対応可能にすること、UNIMARC21 (機械可読目録) に一層フィットすることが目ざされている。一方、ドイツの目録規則(RAK - Musik)は、1986年から楽譜、AV資料はその後出発しているが、やはり国際性を目指した典拠ファイルを視野に置こうとする動きがあることがS. ゼーヴィクの発表で述べられた。では音楽資料に密接なユニフォームタイトルがどうなっていくべきかという大命題については、目録委員会のセッション2に繋ぐことになった。

午後後半、AV資料委員会では、貴重な音楽遺産である過去のメディアのAV資料の保存技術について、スイス、ルガーノの国立録音資料館、ブリティッシュ・ライブラリ、フランス新国立図書館、フランス国立AV研究所<sup>3</sup>、米国議会図書館の事例報告。デジタル化や索引化の先端テクノロジー紹介と、資料内容紹介が交差するセッションとなった。

夕方旧市街にある市長舎でレセプション。

21日 (水) 「著作権委員会2」は、現在抱えて

いる問題がいくつか話題となったが、特記すべきことはなく、相互にチェックする姿勢が国際レベルで存在することに意味があることを確認しあった。ところで音楽学校での館外貸出不可については、現行イタリアのみであるようだ。会議後訪れたパリ音楽院では複写が厳正であることに変わりないが、館外貸し出しは可能であることを確認した。

午前の後半はアウトリーチのセッションだったが、これは別記「アウトリーチ活動について」に譲る。

午後は、恒例のエクスカージョンで、私は、スウェーデンの「小屋から城へ」に参加。素朴な18世紀農家の並ぶ集落とスコットランドから移り住み成功した富裕な事業家ディクソン家の19世紀の館を訪ねた。いずれもヨーテボリ南部スコネ地方。ポニーや羊も一緒に住んだ丸木小屋から、そして城とも見紛う「館」の前庭からもフィヨルドを望むことができた。王侯のためのゲストルームも設えてある館では、今もコンサートなどがしばしば催されている。館の主はかつてヨーテボリ公共図書館を寄贈した功績もある。

22日 (木) 目録委員会2 は、これからのユニフォームタイトルについて、Amadeus プロジェクトを率いるミラノのP. レブツァとインディアナ大学でデジタル・ミュージック・ライブラリー「Variation 2」に属するJ. リレイが論述。「ユニフォームタイトルは誰が必要か? 目録作業の聖域への挑発的関心、そしてデータベース環境の未来に向けての選択」と唄ったAmadeusの観点はU.T.の構文や、区分法、Works, selections, arr. など、作品の資料との単位や関係を表す方法などについて問題点を挙げ、Amadeusの見解を事例化している。メタデータを扱っているリレイは、OCLCのメンバー館の中でもこの問題を先進的に推進している第一人者である。多くの事例に当たる必要性を助言する以外、その論述を静観する構え。座る席もないほど多く集まったオーディエンスと共に目録検索がさらに進展する可能性を探った。彼女及び同僚 H. ヘマジの著した論文はかなり多く全文ダウンロードできるので別記する<sup>4</sup>。作品をコード化することを提唱したのはISBNを推進したドイツだったが、これはその後進展する気配はない。人はやはり「語」で検索するからだろう。カード目録では標目をコントロールすることによってカタログ者と検索する側と作品を結んだのだが、カードをファイルするための規則性に縛られることなく、語順にとらわれず、さらに多言語にリンクできる道具が在ればそれを言語を超えて活用できる。

午前後半は初めてIMSのセッションを聴いた。「伝記、メランコリーそして結末」という総称タイトルの下に「バルトークの”古典的な”最後の

楽譜」をL.シヨムファイ(ブタペストのバルトーク・アーカイヴ)が論述。米国での最晩年の作品である「オーケストラのための協奏曲」、「ヴァイオリン・ソロソナタ(メニューインのバッハ解釈に触発され書いた)」、「ピアノ協奏曲(夫人のため)」を中心に解析し、時代の演奏論にまで繋げた。筆者はこの時代の書簡を辞書を頼りに読んだことがあり、それと重ねて聴くことができ感銘を受けた。一方、N.シメオーネによる「生涯研究におけるメシアン」は、やはり以前、高弟の一人である作曲家G.ベンジャミンの寄稿した追悼記事をフランス語勉強のテキストとして読んだことがある。先頃ドキュメントを出版したばかり<sup>6</sup>のヴィヴィッドな多面体のメシアン研究を興味深く聴いた。作曲家の身近にいることのできた研究者や高弟の研究には、侵しがたい領域があると思わざるを得ない。会議を通じて魅力的な音楽学者と出会い、交流できたことも今回の成果のひとつ。

ひと息入れて午後後半は、カウンシルミーティング2で、①次年度以降の会議地にウィーン(2013)が加わったこと、②会費についての規約改正の総会前の打ち合わせなどで、他に特記することはない。

夕刻突然電に見舞われた人もいたが、中心街を離れた *Orgryte nya* 教会でオルガンコンサート。オルガンは北ドイツ製で2000年に据えられた。会議後のオプション・ツアーも予定されているウプサラのデューベン・コレクションに在る声楽を含む作品を聴くことができた。ソプラノの純度高い演奏、それを支える小アンサンブルとオルガンの響きは会堂にも似合っていて、雨は上がったものの会堂を出てすっかり温度の下がった外気に触れてバス停まで歩くのは心地良かった。海鮮の皿とワインを堪能したのはこの夜だった。

23日(金)最終日、音楽教育機関図書館部会は、音楽学校の貴重資料をマドリッド音楽院、パリ音楽院、チャイコフスキー音楽院から、19世紀後半に設立されたマドリッド音楽院はアルベニスの自筆譜、声楽、弦を中心としたユニークなコレクションがある。パリ音楽院は現在は専門教育用資料が収集の中心となっており、それ以前の資料は、革命の時代に没収され、また19世紀のドビュッシーやフォーレ時代の貴重資料は、国立図書館音楽部門に移管され、文科省のコントロール下にあることが基本となっている歴史が述べられたが、寄贈資料には現代音楽資料コレクション<sup>7</sup>があると報告に留まったが、会議後初めて訪れたパリ音楽院メディアテークの書庫は、革表紙の古い楽譜が未整理のまま眠っており、国立図書館に移管された資料でも2部あるものは1部引き取っていると聴いているので、貴重な未公開コレクションが依然あることには違いない。モスクワ・チャイコフスキー音楽院については、まだWeb目

録化はされていないが、報告者 E.ラッシーナ編集の貴重書目録があり、送付を依頼することができる<sup>7</sup>。歴史を重ねた音楽院図書館には、OPACでは出てこない国立図書館並みの貴重資料がまだまだ眠っていることも事実だ。

クロージング・セッションは、カウンシルと重なる部分をここでは繰り返さないでおく。①この1年間の会員物故者を哀悼するメッセージがあり、②RISM関連では代表委員変更、2013年以降会計はハーバードに移管、DB管理方法も変更に向けて始動、③会費に関する規約一部改正について投票(現行：規約第5条 総会：カウンシルから提出されたIAMLの企画、推進中の仕事、問題を受理し、討議しなければならない。次年度以降3年間の財政見直しについて投票で決定する。→改訂案：次年度以降3年間の財政見込みを会計は提出し、会員は次年度会費を投票する。運用内規4：役員会とカウンシルの報告に加え、総会は協会内の別機関の報告、特に主題委員会、過去3年間にわたる機関誌編集者の報告を受理することができる。[-を削除])など。役員会主導型からカウンシルや総会での合意のボトムアップが近来の傾向。IAMLは規約を実施する必要性があり、それを実行するための改正であることがほとんどで、規約が実施を先行することは少なくなっている。実務プロの集団であり、電子技術のパワーを背景に若手の実行力が後押ししていると感じる。規約が実行より遅れる感が強くなって改正には時間がかかっている。

夕刻よりフェアウェルディナーを海辺の船の博物館脇のレストランで。素朴な滋味あふれる料理とワインに舌鼓を打ち、暮れかけた(といっても11時すぎ)街を連れ立って30分近く歩いて帰る道すがら、「来年(シドニー)も海の近くだね、じゃあ、また来年」と言い合って別れた。来年はアジアにも近いオセアニアなので、アジアからの発表者が多く出ることが期待されている。公共図書館部会、教育機関図書館部会はいずれも座長から要請されている。後者は、伝統楽器を教育機関でどのように維持保管し、教育に活用しているかについての報告が期待されている。

注

- 1 <http://www.onb.ac.at/sammlungen/musik/index.htm> Palais Mollard (Vienna 1, Herrengasse 9)
- 2 <http://www.iaml.at>
- 3 <http://www.cltir.org/PUBS/reports/pub135> atouveron@ina.fr
- 4-1 Exploiting musical connections: a proposal for support of work relationships in a digital music library/ Jenn Riley
- 4-2 From abstract to virtual entities implementation of work-based searching in a multimedia digital library / Jenn Riley and Harriette Hemmasi

- 5 Messiaen / Peter Hill ; Nigel Simeone. Yale Univ. Press, 2005 ISBN 0-300-10907-5
- 6 B. Kantuser (1921-1999) スロヴェニア出身の作曲家で国際現代音楽図書館をフォンテンブローに設立したが没後パリ音楽院に寄贈。
- 7 連絡先問い合わせ中



photo by Michel Fingerhut

金澤正剛、藤本里子(現地で長く住んでおられ、ご主人は音楽家)各氏と筆者、Artisten エントランスで

☆ お知らせ ☆

2007年7月〜6日に開催予定のIAMLシドニー会議では、日本、またアジアの楽器とその専門 教育機関での活用について発表者を求めています。ぜひこの機会にとと思われる方は筆者、あるいは日本支部役員にご連絡下さるようお願いいたします。

IAMLには、初めての会議参加を補助する制度もあります。現在会員でない方もご相談下さい。

音楽情報のデジタル化とその可能性

伊藤真理

2006年イェーテボリ会議は、前回参加した2002年米国パークレー会議に比べ、情報発信のためのテクニカルな情報交換よりも、音楽情報自体、または音楽研究に関わる情報提供についての発表が多く行われたように思われる。これは、本会議が IAML、IAMIC、IMSの合同による初めての会議であったためかもしれない。参加者も、図

書館、出版関係者のみならず、音楽研究者、作曲家など多彩であった。本稿では、個人的な印象が強かった音楽情報のデジタル化をテーマとして、セッションの内容やインフォーマルなコミュニケーションも併せてご紹介しながら、検討してみたい。

本会議は、スウェーデンという国は、豊かな音楽文化を有しているのだということを十分にアピールしてくれたように思う。これについては本誌の他の記事で詳しく報告されるであろうから、ここでは省略する。その筆頭がUppsala University Library所蔵の”Düben Collection”である。会議後のツアー参加者には、実際に閲覧する機会も与えられた。



コレクションの資料をかじってしまったという  
いわれのあるネズミのシンボル・マーク

この貴重なコレクションのデータベースが、2006年9月公開される予定であることが、会議初日の”Swedish Archives at Home and Abroad”で紹介された。コレクションの内容については、読者の方々の方が詳しいと思われるのでここでは触れない。データベースは、大きく、作品、コレクション資料、透かし、刊行フォーマットに関する情報群から構成されている。各曲に対して、コレクション資料の書誌事項のみならず、楽曲編成、音域、声部の構成、写譜者、関連文献など、非常に詳細な情報を記録している。

Commission on Service and Trainingセッションでは、Bibliothèque national de France (BnF) のPhilidor Collectionが紹介された。BnF所蔵のルイ14世時代の音楽家兼司書André Danican Philidorによる筆写譜のデジタル化を行っている。現在プロジェクトの第3期に入っており、コレクションの重要な一部分を所蔵するCity Library of Versaillesと共同して、対象資料の数を拡大して、さらに大規模な高品質のデジタルイメージ情報を提供することになった。BnFデジタル図書館Gallica<sup>1</sup>でアクセスすることができる。

筆者は出席できなかったが、プログラム上で見る限りでも、University Library Frankfurt am MainのPortrait collection F. N. Manskopf、Royal Conservatoire Brusselsのリブレットコレクション、Smetana Museumのスメタナの音楽資料のデ

デジタル化、Russian State Libraryのデジタルプロジェクト、Packard Humanities InstituteとSalzburg Mozarteumによるモーツァルトの全集のデジタル化とオペラのデジタルスキニングによるファクシミリ版作成など、さまざまなデジタル・アーカイブのプロジェクトがある。

AV 資料については、IAML Commission on Audio - Visual Materials のセッションで、フランス、イギリス、アメリカの事例紹介がなされた。

セッションでは取り上げられていないが、業者のエキシビションで、F. シューベルトの手稿資料のデジタルコピーのデモンストレーションが行われていた。ウィーン市立図書館、ウィーン大学とInstitute for applied Musicology and Psychologyで共同開発されたもの<sup>2</sup>で、検索の利便性の他に、印刷機能を充実させていた。

また、今年初めにジュリアード音楽院がベートーヴェンの大フーガの草稿など、大規模な貴重資料の寄贈を受けたことは大変話題になった。ジュリアードは、コレクションのために建物を改築中だが、併せてデジタルイメージにアクセスできるようにデータベースを構築中である。それまでも、資料利用についてジュリアードに問い合わせれば、対応してくれるということである。

書誌情報のデータベースについてもいくつかのセッションがあった。

演奏会プログラムは、グレイ・リテラチャに属しているが、音楽学的にも歴史研究において重要な資料である。イギリスとアイルランドでは、コレクションレベルの記述によるオンラインデータベースを構築し、ドキュメンテーション活動を行っている。

Naxos Music Libraryは、オンライン図書館蔵書目録 (OPAC) とリンクし、目録検索に対してNaxosの録音情報を同時にアクセスすることができるようにしている。また、Chadwyck-Healey *International Index to Music Periodicals* (IIMP)の各書誌情報にリンクすることで、IIMPで参照されている主要な楽曲、作曲家やアーティストの録音情報にアクセスすることができるシステムを提供している。

いくつかの国内の図書館でもすでに利用されている、*Index to Printed Music* (IPM) のデモンストレーションを兼ねたセッションがあった。IPMは、*Historical sets, collected editions, and monuments of music compiled by Anna Harriet Heyer*を基にデータを更新し、オンライン・インデックスとしての検索機能を充実している。OPACでは、楽譜の検索は網羅的にできない、という説明があった。同意できる点ではあったが、それでよいとすませられるのだろうか。レファレンス・ツールの基本である OPAC で資料が探せ

ないのは本来おかしな話である。しかし、IPMですら、主題検索、たとえば、19世紀のオルガン音楽<sup>3</sup>のような質問、には十分に対応できていない。データ収録の選択については、専門家を含めた分析と確認作業により、正確な情報を構築するための相当な努力を行っていることがわかった。収録対象資料については、外部からの推薦を受け付けるということであった。資料の出版国による偏りがないよう、国内出版物で価値があるにもかかわらず未収録のものについては、登録されるように働きかけていく必要がある。資料は検索され、利用されなければ意味がない。有用なデータベースがますます充実するための努力に対して、協力を惜しむべきではなからう。

今年は、Répertoire International de la Presse Musicale (RIPM) の25周年にあたるということである。その記念を祝うセッションが設けられた。RIPM 作成の歴史や類似データベースとの比較について統計的に解説された。出席者は、この書誌の価値を改めて認識したことであろう。RIPM は現在、NISC、OCLC、Ebsco など様々なベンダーから提供されている。各ベンダーのシステムの検索・表示機能により、データベースの効果が十分に発揮できていないということで、新たに RIPM 本部では、こちらのニーズに柔軟に対応してくれる小さなシステム設計会社と提携して、*RIPM Online Archive of Music Periodicals*というシステムを構築し、そのデモンストレーションも行われた。各書誌情報は、雑誌記事のイメージデータにリンクし、また検索語が記事の中のどの部分にヒットしたかなどの表示も工夫されている。

このように音楽情報、音楽に関する書誌情報ともに、デジタルプロジェクトについては、枚挙にいとまがない。情報へのアクセス性や利用価値を鑑みれば、その意義は非常に大きいことはいうまでもない。振り返って国内では伝統音楽のみならず西洋音楽に関しても、南葵文庫をはじめとして前田家のコレクションなど、ごく一部の専門研究者のみが知る貴重なコレクションが散在しているのである。コレクション所有者の意向を尊重しなければならないのはもちろんであるが、このような重要なコレクションの存在を、正確に記録しておくことは大変重要である。まずは、RISM に登録することから始めていく必要があろう。

さて、各コレクション、あるいは音楽情報についての特性を可能な限り提供しようとする、単純なダブリン・コアのようなフォーマットでは到底対処できない。あるいは EAD のような複雑なフォーマットを用いるにしろ、音楽資料の特性については、カスタマイズが必要であらう。そのように考えると、一般的なデジタル・アーカイブの世界で標準化や相互運用性が目指されている中で、Düben Collection のようにやはり独自開発によるデジタル化は今後も続くことは容易に予測で

きる。このように次々とでてくる多種多様なデジタルコレクションを把握し、効率よく見つけるためにはどうすればよいのであろうか。図書館員はいつも網の目のようにアンテナを張って、新しいデジタルコレクションを見つけなければならないのであろうか。また、各コレクション群はそれぞれシステムもフォーマットも異なるため、一様に検索することはできない。Google や Yahoo などの検索エンジンを用いた楽譜イメージの検索では、検索結果は、検索エンジンの特徴や検索質問の方法や語彙の選択に大きく依存することがわかっている<sup>4</sup>。このような状況下では、Naxos Music Library で行われている OPAC とのリンクは、蔵書目録機能の拡大のみならず、効率のよい情報検索へのひとつの有効な解決策である。

最後に書誌情報の組織化に関連したセッションについて述べる。Information Technology Committee による "A Web ontology for music?" が行われた。オントロジーは、情報学研究のみならず、情報探索研究においても意味論的な情報探索手段として着目されている。米国音楽図書館協会が音楽情報のメタデータに関する検討、ダブリン・コアフォーマットを用いた楽譜資料の書誌情報の作成の試み、FRBR (書誌レコードの機能的要件) に基づく楽譜の書誌情報の蓄積と検索についてなど、音楽資料を対象とした研究が活発になっている。今回のセッションでは、オントロジーという概念的な要素の強いテーマであったため、パネリスト間での理解に差があり、これからの具体的な方向性を討議するまでには至らなかった。これを契機として、本委員会が先導して、オントロジー構築を目指していくよう継続的な検討を期待する。

IAML Cataloguing Commission による "Cataloguing Code Development" のセッションでは、英米目録規則が改訂され、新たに Resource Description and Access (RDA) になることから、新目録規則の音楽資料への対応をテーマとしていた。これまでの目録規則のあり方とは違い、RDA は資料内容に関する規定であり、外形式については、JSC GMD/SMD ワーキング・グループが検討している。また、ISBD は付録として収載されるようである。現時点ではまだ音楽資料への影響ははっきりとしていない。当日講演者の一人が欠席され、この委員会が企画していたそのほかのセッションが中止になったこともあり、RDA から、統一タイトルの国際的な取り扱いへ議題が移行した。これは統一タイトルの機能について、国際的な合意が得られるのであるならば、各国が協力して、グローバルな統一タイトルのデータベースを構築しようというものである。セッション出席者からの懸念として、テクニカルな問題、各国の目録規則の違いから生ずる統一タイトルの表記に関する差の問題があげられた。しかし、基本的にこ

のようなデータベース構築に対して強い反対意見はなかった。セッション後の Library of Congress 図書館員や Deutsches Musik Archiv, Berlin 図書館員との個人的なディスカッションで、Virtual International Authority File (VIAF)<sup>5</sup> のような形での統一タイトルファイルのリンクにより、テクニカルな問題は回避できるのではないかという合意を得られた。筆者が国内と米国で行った楽譜検索調査<sup>6</sup>では、現在の図書館システムでは統一タイトルの機能を十分に活かすことが効率的な検索に必要であることがわかった。利用者のほうは、そのような書誌情報に関する知識ではなく、各自の専門分野の専門的な知識を利用する傾向にある。たとえば、原タイトルがイタリア語の作品を検索する際には、母国語の次にイタリア語を用いる傾向がある。利用者の専門知識の活用を無駄にしないようにするには、様々な言語 (調査対象国では英語が優先) による検索の保証が有効となる。国内でも、各図書館で統一タイトルの機能についてご意見をお出しいただき、ぜひプロジェクトに寄与できればと願っている。

その他、ISBD (PM) に関して、会議終了後、IAML ワーキング・グループによるコメントを入手している<sup>7</sup>。特に用語集については時代にそぐわない用語を修正している。IFLA はウェブ上で公式にコメントを求めており、直接コメントを寄せることも可能である<sup>8</sup>。

UNIMARCについては、Sub-comission on UNIMARC でタグ128「楽曲形式」に関して作業を継続している。現在、コードと用語から検索可能なシステムを構築中<sup>9</sup>で、約25% の定義が終了している。こちらも実際にウェブサイトにアクセスして試してみることが可能である。

#### 注

- 1 URL: <http://gallica.bnf.fr/> (accessed 2006-7-18)
- 2 URL: <http://www.schubert-online.at> (accessed 2006-7-18)
- 3 この類の質問は、筆者が図書館利用者に対して調査を行った際 (Itoh, Mari. User's Search Behavior: Search Tactics Used in Online Catalog Searching for Music Scores (under submission)) 多く発せられたもので、実際に検索を試みてもらったが、タイトル・キーワードなどで対応するほかに方法がなかった。
- 4 Wheeler, Maurice B.; Venetis, Mary Jo. Evaluation of Web access to historical sheet music collections and music-related iconography. [online] First Monday. vol. 10, no. 10, 2005. URL:[http://www.firstmonday.org/issues/issue10\\_10/wheeler/index.html](http://www.firstmonday.org/issues/issue10_10/wheeler/index.html) (accessed 2006-7-18)
- 5 Library of Congress, Die Deutsche Bibliothek, OCLCが共同で開発中のヴァーチャルな人名典

拋ファイルのプロジェクト。URL:

<<http://www.oclc.org/research/projects/viaf/>>

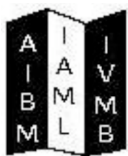
6 Itoh, Mari. "Online Catalog Searching for Music Scores How to Guide End Users"(under submission)

7 希望する方は、筆者までご連絡ください。

<[mritoh@asu.aasa.ac.jp](mailto:mritoh@asu.aasa.ac.jp)>

8 URL: <<http://www.ifla.org/VII/s13/pubs/Invitation4WWreview07-2006.htm>>

9 URL: <[http://urfm.homeip.net/public/unimarc\\_forms/searchforms.htm](http://urfm.homeip.net/public/unimarc_forms/searchforms.htm)>



## 国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部 2006年総会報告

日時：2006年5月20日 (土) 午後1時半～2時半

場所：東京文化会館小会議室

出席者：荒川恒子、伊藤真理、金澤正剛、佐藤みどり、関根和江、関根敏子、藤堂雍子、長谷川由美子、樋口隆一、森佳子

委任状提出者：伊東辰彦、加藤修子、加藤信哉、金井喜一郎、加納マリ、蒲谷朋子、岸本宏子、草野妙子、佐々木勉、上法茂、末永理恵子、杉本ゆり、竹内道敬、手代木俊一、土田英三郎、遠山一行、西原稔、星野宏美、細田勉、正木光江、松下鈞、松橋麻利、森節子、山田高誌、米田かおり、林淑姫、上野学園大学音楽・文化学部図書館、エリザベト音楽大学附属図書館、大阪音楽大学音楽博物館、大阪芸術大学図書館、国立音楽大学図書館、昭和音楽大学附属図書館、相愛大学・相愛短期大学図書館、東京音楽大学附属図書館、同志社女子大学図書館情報センター、同朋学園大学部附属図書館、桐朋学園大学音楽学部附属図書館、名古屋芸術大学附属図書館、日本近代音楽館、民主音楽協会民音音楽資料館、武蔵野音楽大学図書館

出席者10人＋委任状41通で総会成立

(会員総数：個人会員61 団体会員17の過半数)

開会の辞：荒川恒子支部長

議長選出：樋口隆一氏

### I. 報告事項

1) 会員の異動

退会：岩川康弘氏、中村恭子氏、荒川周氏、  
齊藤ちか子氏、塚本菜々氏

自然退会：安保敏文氏、筒井敬子氏

入会：杉本ゆり氏、松橋麻利氏、星野宏美氏

2) 2005年活動報告

13頁参照

3) 2005年会計報告と会計監査報告

会計報告は別紙参照。

会計監査からは適正に運営されていることの確認があった。

会員数の減少に加え、ユーロが高くなっているため、現在の会費で賄えるかどうかの判断がいつか必要になる。

4) 会員会議参加補助基金への応募結果

応募者なし。

理由：

1. 国際会議の日程

2. 現役の図書館員がIAML日本支部には少ない。参加した方からはよい反応が返ってくるため、教える立場にある方も積極的に若い方を誘って欲しい。明治学院では、研修という形で8週間イリノイ大学に出張させる慣例がある。

5) ニュースレター (第26号から現委員担当)

第24号 2005年1月

2004年IAML-IASA 国際会議 (於：オスロ) 報告 / 荒川恒子; IAMLオスロ会議を契機に動き出したRISMへのデータ提供/長谷川由美子; オスロ会議に出席して/金井喜一郎

第25号 2005年8月

2004年IAML-IASA 国際会議 (於：オスロ) 報告: OSLO CONGRESS とその後/藤堂 雍子

第26号 2005年12月

IAML日本支部第38回例会報告; チマローザ作曲《秘密の結婚》(1792)の秘密: 国立音楽大学にて新発見されたナポリ版 (1793) 楽譜の特定と、2曲の差し替えアリアについて/山田高誌; IAML 10-15 July 2005 in Warsaw 報告/荒川恒子; IAML 2005 WARSAW/藤堂雍子; IAMLポーランド国際会議・RILM部門/関根敏子; コンサート報告/関根敏子

第27号 2006年3月

IAML日本支部第39回例会報告; 音楽図書館協議会秋の研究セミナー報告/伊藤真理; 音楽図書館協議会主催IAML共催&例会秋の研究セミナー2005.12.1～12.2「音楽図書館と著作権」に参加して/藤堂雍子

6) ホームページは7回更新。そのうち前2回が前役員による。ホームページの内容更新が3回、ニュースレターに掲載された内容をホームページ上でも公開が2回。

7) アウトリーチ委員会とコピーライト委員会からのアンケートへの情報提供について

アウトリーチ委員会

藤堂副支部長が団体会員へアウトリーチ(周辺諸

国へのサポート)についてアンケートを送送。

国立音大から回答があった。

80年代より資料交換と寄贈。しかし周辺諸国とIAMLがらみで付き合いがあるかという観点から見ると、あまりないのが現状。特に来年はシドニーで会議があるため、日本にアウトリーチが求められる可能性が高い。

他国のレポートでは具体的にはデジタル化のための機材寄贈や研修機会提供。例：パリ音楽院は毎年フランスで出版された楽譜を決まったところに送る。IAMLではないが国として旧共産圏の国には機材援助が行なわれている。たとえばソニーがエストニアに機材を寄贈等。ミュージック・ペンクラブは中央音楽院にCDを寄贈。

IAMLとしてアピールの必要性を感じる。

コピーライト委員会 日本の現状を報告

ラテン系の各国が非常に厳しくコピーライトを守っているのに対して、日本では慣用的に行なっていることも少なくない。

特に映像資料について、法令化なのか使う側がガイドラインを作るのかが音楽図書館協議会の総会で話し合われる予定だが、これらの動きや、音楽著作権委員会が啓蒙活動を始めたことを含めたレポートを提出。

8) その他

1. ホームページへの最新ニュース掲載開始

本部の電子版IAMLのニューズレターからピックアップしたり、国内の音楽関係展覧会のお知らせを掲載。原稿は役員に諮り承認を受けている。

2. シビックホールへの団体登録

初年度登録は煩雑だったが、次年度からの再登録は簡単になる。

シビックホールの斜め前に区民会館があり、こちらも利用可能。

3. IMCその後

IMC事務局の松下氏から以下の回答を得た。

1) 海老澤会長がパリ本部に出向き、日本支部廃止を正式に伝えた。

2) 初期の活動記録については、故戸田邦雄書記長宅にあったワープロのフロッピーに保存されている記録を読み出すことには失敗している。適合する変換ソフトが無い。

3) 近代音楽館の林氏からIMC日本支部設立当初の記事を頂戴したほか、海老澤会長時代の資料は海老澤宅に雑然と置かれている。これらの整理を担当している渡辺氏が海老澤会長と共にMozart生誕250年の諸行事に奔走しているため、整理が進んでいない。

4) 松下が加わる資料整理は今年の夏に持ち越しとなった。

## I I. 協議事項

1) 2006年活動計画

13頁参照

2) 2006年予算案

別紙参照

会議費：公共施設を利用することで減額

交通費：役員出張費を増額

アルバイト代：会計監査からアルバイト代を活用すべきとの指摘あり。現状のまま据え置き發送業務に使用する。

本部への会費送金：総会前に完了

RILM委員会への分担金：予算は6万円、

ただし4万円を寄付

3) ヨーテボリ会議への代表参加者：荒川支部長

## III. 会計監査承認

## IV. その他

荒川氏（支部長）：

今後の活動計画が記されていないことに関して。

1月の役員会は非常に長い時間をかけて今後の役員会のあり方について検討。役員はそれぞれの役割を責任を持って行なうことを再確認した。

1期目は、理想は追ったが実行が伴わなかった感があるため、それについて反省がある。

今期の役員は自分としては2期目だが、実行を伴った活動をめざし、現在そのように動いている。任期を全うし、次の人にバトンタッチしたい。

伊藤氏（ホームページ）：

英語ホームページ開設を課題としたい。

関根氏（ニューズレター）：

会員からの発信が必要と感じる。

報告や文字情報を提供するだけでなく、もう少しアクティブな紙面を目指したい。

情報が、ホームページのニュースと重複しても構わない。

荒川氏：

国内音楽関係出版物の情報を国際会議に持参したく思っているが、関係団体からの反応はあまりはかばかしくない。

海外では日本の情報を必要としている。

今後積極的に日本から発信して行きたい。

## 2005年活動報告と2006年活動計画

	2005年度報告	2006年活動計画中間報告
国際会議	ワルシャワ会議 2005年6月10日—15日 出席者：荒川恒子、藤堂雍子、関根敏子、井上公子、上法茂、 非会員として岩崎淑 代表出席者：荒川恒子 荒川恒子（カウンスル・ミーティング） ナショナル・レポート 委員：藤堂雍子 著作権委員会メンバー	ヨーテボリ会議 2006年6月18-23 出席者：荒川恒子、藤堂雍子、金澤正剛、樋口隆一、伊藤真理 代表出席者：荒川恒子
総会	2005年6月12日（土曜） 15:00- 場所：東京文化会館中会議室 内容：活動計画、年間予算	2006年5月20日（土曜） 場所：東京文化会館小会議室 内容：活動計画、年間予算
役員会	第1回：5月14日（国立音楽大学） 第2回：6月3日（東京文化会館） 第3回：9月14日（東京芸術劇場小会議室）	第1回：1月27日（東京芸術劇場） 第2回：5月20日（東京文化会館）
例会・集会	第38回例会 2005年5月14日（国立音楽大学図書館） 題目：チマローザ《秘密の結婚》（1792）の秘密 国立音楽大学附属図書館で新発見のナポリ上演版（1793）第一ヴァージョン楽譜の特定と、差し替えエリアについて 発表：山田高誌（日本学術振興会特別研究員・ナポリ音楽院附属音楽研究所“カーサ・ピッチェニ”客員研究員） 総会後懇親会 第39回例会 音楽図書館協議会と共催 2005年12月1日-2日 パシフィコ横浜他 テーマ：聞こう、話そう、著作権問題！「音楽図書館と著作権」—解決の道を探る	第40回例会 5月20日（東京文化会館） 題目：IAML 日本支部の可能性を考える—Rプロジェクトを中心に 発題についてのコメント：荒川、藤堂、RILM 国際会議出席報告・RISM 所感：金沢正剛 総会後懇親会
ニューズレター	第24号 2005年1月 第25号 2005年8月 第26号 2005年12月	第27号 2006年3月
ホームページ	7回更新（2回：2005年6月12日まで；5回：それ以降12月まで）	1回更新
ニューズレター掲載	2回	1回
その他	IMC 総会出席（2005年4月20日） 本部への会費送金（2005年6月3日）	文京シビックホールに団体登録 コピーライト委員会への報告 アウトリーチ委員会への報告

## IAML日本支部第41回例会報告

日本支部の可能性を考える  
—IAML Rプロジェクトを中心に—

森佳子

2006年度総会の後に引き続き例会が行われた。支部長荒川恒子氏、副支部長藤堂雍子氏より発題についてのコメントがあった後、2005年3月16日から19日にかけてニューヨーク市立大学で行われた RILM国際会議について前支部長である金澤正剛氏による報告があった。その4日間に及ぶ会議の詳細な報告は、気さくに話し掛けて来るニューヨーカーや出会った専門家らとの交流の様子、国際会議のオープンな雰囲気や伝わって来る楽しいお話であった。その後 RISM の所感について出席者らによる活発な討論が行われた。(コメント、報告および討論の内容については簡略にまとめ、要点のみを記させて頂いた。)

## はじめに—荒川氏

総会から続く話題であるが、日本支部を活発にするためにささやかでもいいから何か出来ないかと考えている。また、国際大会に行くと感じるのは、日本の資料を求める声が多いということである。しかし現在、日本の RISM はどうあるべきかについてまだ話が進んでいない。IAML の基本姿勢は情報交換であるから、まずこれを行えるような気楽な会にしていきたい。

今回は、国際音楽学会と一緒に国際大会が開かれることになっている。初めての試みでもあるので、是非多くの方に参加して頂きたい。

## 「Rプロジェクトと日本での情報検索」について—藤堂氏

(氏がまず資料を示しながら、RISM、RILM、RidIM、RIPM のデジタル化、オンライン化について一通り説明を行った後) オンラインで先端的なのは EBSCO である。総合大学(と国立音大)のオンライン環境はよく、単科大学との格差が広がっている。RILM からのアンケートで、RILM の使われ方と今後どのように展開すればよいのかについて尋ねているが、日本からも意見を言うべきだろう。まず音楽書誌に対する関心を高める必要があるが、R プロジェクトは学者だけでなく広く浸透していくべきだと考える。

## RILM 国際会議の報告—金澤氏

今回が最初の RILM 国際会議であったというのは驚きに値する。RILM がどのような経過を経て現在どのような仕事を行っているか、および今後の問題点がメインテーマとなり、それに関係した発表が行われた。全体的に内容は専門的なものと気楽に聞けるものとが混ざっていた様子であった。

一日目：セッション1のBで、フリードリヒ・ルードヴィヒの中世音楽への功績、グレゴリオ聖

歌の歴史編集史、ヴィルガの研究およびモンテ・カシノ修道院の記譜法についての発表を聞く。セッション2のA(国際音楽学会会長の David Fallows 氏が司会)でルネサンスの歴史編集史について(Vendrix 氏)、16世紀に活躍した最初の歴史的音楽学者について、16世紀のマニュスクリプト研究者であるブラムナックについての発表を聞く。その後、ティーパーティに出席するが、大変な盛り上がりを見せる。セッション3のAで音楽学者としてのサン=サーンス、Bで民族音楽学の創始者について、再びAで音楽理論の歴史化についての発表を聞く。

二日目：セッション1のB(Philippe Vendrix 氏が司会)でインディアンの音楽学、アフリカの音楽史の遺産、ニュージーランドの音楽史、ブラジルの音楽学についての発表を聞く。セッション4のA(Zdravko Blazekovic 氏が司会)でルカチック(バロック時代のクロアチアの作曲家)についての研究発表が行われたが、そこでブラムナックのフィルムが披露され、その後音楽会&ディスカッションが行われる。この日はセント・パトリック・デイという、アイルランドの祭りの日でもあった。

三日目：RLIM のオフィスを見学し、システムについて見せてもらう。そこで働く人びとには若い人が多く、日本人もいた。セッション3のBから会場に入り、ポルトガル音楽のファシズムから現代までの変化、ラトヴィアの音楽学(Mikhailets 氏)、中国の国民音楽についての発表を聞く。その後 Mikhailets 氏にストロク氏というインプレサリオが加わり三人で意気投合する。今まで参加してこなかった国の人びとが日本に興味を持っていることを知る。

四日目：セッション1とセッション2で一つずつ発表を聞いた後、セッション3のAでバーニーとホーキンスの著書におけるルソーの印象について(Green 氏)の発表を聞き、これが一番印象に残った。Green 氏は日本の音楽学会に興味があるそうで(入会を希望)、これも日本に興味を持つ人が増えている一つの例と言える。

## RISM の所感(要点)

\*日本の RILM に関しては関係者が良くやってくれている。それに比べて立ち遅れているのがこの RISM 問題である。(金澤氏)

\*資料を所有している側の理解を求める必要があるが、これが難しい問題である。(樋口氏)

\*国立音大に所蔵される印刷譜の部分はすでに本部に送り、マニュスクリプトもこれから出す予定である。その際きちんと基準を知る必要があると感じた。(長谷川氏)

\*RISM を取り巻く状況は40年のうちに変わってきている。昔はその価値すら理解されなかったが、今では仕事をする意味もある。自分自身の仕

事として去年は音楽学会でシンポジウムを主催し、ウィーン楽友協会のチーフである Otto Biber の記念論文集には前田コレクションと南葵楽堂について書き、こちらは出版される予定である。また今後日本で出版予定の著書にも「日本の音楽資料」について書いている。(樋口氏)

\*資料を所蔵する側が表に出せる場合はよい。また送ってもらった資料の処理をどうするかについても行動を起こせばよいことである。しかし、閉ざされた場所をどうやって開けていくかは難しい問題である。国内組織は出来るところから作っていけばよい。(荒川氏)

\*組織化については IAML と日本音楽学会と一緒にやっていく必要がある。準備委員会を作ってもいいのではないかと。動ける人で作る必要があると思う。(樋口氏)

\*組織を先ず作って情報を入れていくのが大事である。またプライベート・コレクションは所有者が移ると難しく、公開されないことには仕方がない面もある。(長谷川氏)

\*公開されなくとも、こちらから尋ねたら返答してくれるならよい。すべてを網羅しなくてもよいが、働いてくれる人が必要である。そのためには資金が必要であり、プール金を会員大会参加補助の他に、さらに広い目的のために使えないか議論すべきである。(荒川氏)

\*科研の共同研究でプロジェクトを立ち上げれば資金が得られるか。今まで日本の音楽学者が自国の資料などに興味を持たなかったのが、現況を引き起こした要因と思われる。(樋口氏)

\*しかし普通、音楽学者は自分の研究に関係した資料にしか興味がないものであろう。だからこそ、図書館に関係した立場の人々の存在が重要である。(荒川氏)

\*スイスの RISM では自国の資料を丁寧に拾い、19世紀のものまでである。日本でもこれからの問題としてやらなくてはならないが、外国および日本で出版されたもの以外にも、洋楽と邦楽があって難しい。(長谷川氏)

\*日本の洋楽資料のデータベースについてだが、音楽学会と IAML で科研費(データベース用)をプロジェクトとして申請してはどうか。おそらく日本の学術に貢献するという意味で取りやすいと思う。(伊藤氏)

\*誰かが中心になって動き始めなければならぬ。興味のある人を集めてコミュニティを作り、秋の音楽学会の総会で認めてもらう必要がある。(樋口氏)

\*組織を立ち上げる際、代表は年配の方にやってもらわねばならないが、中心になって働くのは40代後半から50代前半くらいの人でないと途中で途絶える危険性がある。(荒川氏)

## 事務局だより

@アウトリーチ活動について(藤堂雍子)

ヨーテボリ大会を目前にした5月にアウトリーチ活動の有無について、機関メンバー館に、お問い合わせさせていただいた。直前のこのような問い合わせになってしまったことで、とまどいを感じられた図書館のご担当者もおられたかもしれない。それはともかく、残念ながら回答は役員の属する図書館からの一件だけであった。その一件の内容は1987年以来、母体である種類教育機関との①機関発行物、②音楽図書館協議会あるいは協会の発行物などの「資料交換」、加えて③自国の音楽雑誌や④現代音楽の楽譜などを定期的に寄贈している、というものだった。

お返事のなかった他の機関も類似の刊行物などの交換はおつきあいとしてしておられるのではないだろうか? 図書館が組織的にルーチンとしていることは少ないのだろうか? 音楽分野での近隣アジア諸国とのこうしたおつきあいはさして多くはないにしても、きっと何かありそうではないか? と正直疑問に思った。しかし回答期限も迫っていて、大学上層部や別部門で交換しておられるかもしれないことを確かめることはできなかった。国が資金や施設設備援助をしている(特に東欧圏に対し)と報告された事例も、彼の地で耳にしたり、実際メーカー名を明記した機材が日本国のラベルマークを付しているのを目の当たりにしたこともあるが、ともかくも今回はお返事いただいたままを本部へ返し、加えて上記の私見や、日本の音楽出版業界関係者から、中国へのマーケット拡大について問い合わせがあったことなどをエピソードとして報告するだけに留めたことを、ここでご報告するしかない。

一方、来年シドニー会議は、7月1日からと予告された。欧米以外での IAML 開催は、1989年東京大会、1999年ウェリントン(ニュージーランド)を含めて3回目である。未知の国々からの報告や研究が期待されている。つまり、近隣アジア諸国からの参加も期待されているということでもある。ヨーロッパ勢にとっては遠路はるばる来るからには、欧米諸国の日常ではない何かを知る機会でもあり、アウトリーチへの旅でもある。発表者をオセアニアだけでなくアジアから、という熱い希望が寄せられた。来年に向けて、ぜひともこの点を視野におき、アウトリーチ活動について、もう一度周辺を見回していただきたいと願っている。

東京会議の頃、アウトリーチ活動は誤解されていたように思う。今日、西洋社会から一方通行の「援助」だけではない相互の「活動」として模索されてきている。確かに図書館活動のアジアでのレベルは欧米諸国と比べものにならないほどの途上、デジタル世界へのあるいは全くそれ以前(インドネシアのジョグジャカルタ地域での大地

震が先頃報道され、会員でもあるバリ音楽研究者へも現在問い合わせ中だが、復旧のため、連絡さえとれないほど多忙な日々を送っておられることが伝わってきている <http://sound.jp/kartika/> の厳しい状況であるところはまだまだある。日本の中でさえ、お蔵入りになりかねないような民族音楽資料類を抱えて少人数で踏みとどまっておられるところは、少なくない。不況が転じられつつある、との報道がようやく出てきたとはいえ、いや格差がひどくなっているだけ、といった嘆きはいつも交差しているのが実情である。

今回のヨーテボリ大会でもパレスチナでの音楽教育普及活動がアウトリーチ活動報告として取り上げられた。一見、図書館活動とアウトリーチ活動の接点を見つけることは難しい。しかし近隣諸国との異文化交流接点を探る中にこそ、その本質があるように思われる。そして、その中に失われた文化の力が潜んでいることに気づかされる。Culture の語源に尋ねるまでもなく、埋もれた文化を耕し掘り起こすことこそアウトリーチ活動の本質であろう。

@RISMへの筆写譜データ提出始まる  
(長谷川由美子)

国立音楽大学附属図書館特別資料部ではかねてから図書館所蔵の筆写譜について RISM A/II へのデータ提出のための作業を行なってきたが、7月21日にその第一回目を送り出した。

今回のデータは以下のとおりである。

- ☆Senaille(1687-1730)のヴァイオリンソナタ20曲
- ☆Zingarelli(1752-1837)のオペラ《ロメオとジュリエット》抜粋
- ☆Giubilei(18世紀)のミサ曲
- ☆Perez(1711-1778)のオペラアリア集
- ☆Paisiello(1740-1816)の《Dixit Dominus》
- ☆Cimarosa(1749-1801)の《Mercato di Malmantile》抜粋
- ☆Salieri(1750-1825)の《受難曲》全曲
- ☆オペラアリア集：内容 Bertoni(1725-1813); Tarch(1759c-1814); Fedrini(1764-1826); Pugnani(1731-1798)
- ☆Gossec(1734-1829)の《Berthe》からのアリア
- ☆オペラアリア集：内容 Jommelli(1714-1774); Perez(1711-1778); Galuppi(1706-1785)
- ☆Spontiniの《Tantum ergo》自筆譜
- ☆Rossini(1792-1868)の《嵐と晴天》自筆譜

RISM ではデータを一曲づつ作成するため、提出データは65にのぼった。インチピットはソナタ、交響曲、ミサ曲等は各楽章に必要で、オペラのアリアも伴奏部分、アリア部分と一曲につき2種類が必要である。RISM 本部にインチピットが既にあるものや、主題目録が完備されている作品は除いたが、インチピットの有無が曲の同定には欠くことのできない要素のため、慎重に作成し

た。その数は138で、作成には「フィナーレ6.0」を用いた。

なお、RISM A / II への情報提供に関しては、全データを提出した後（2007年3月予定）、更に詳しい報告を行なう予定である。

### 事務局への連絡

IAML日本支部では、日本近代音楽館のご好意により、同館に事務局住所をおかせていただいておりますが、同館には事務局スタッフが常駐しておりません。郵便物などのチェックは遅れがちになってしまいますので、お急ぎの連絡は、事務局長の長谷川由美子まで直接お願いします。

### 編集デスクより

残暑お見舞い申し上げます。暑い暑いと言っている間にも、夕暮れ時ともなれば、はや秋の気配が感じられるこのごろです。ニューズレター第28号をお届けします。

今回は、6月にヨーテボリで開かれた IAML 国際会議の報告、5月の総会と例会の報告が中心です。ご報告いただきました皆様に感謝します。

(関根和江)

Newsletter—国際音楽資料情報協会日本支部  
第28号

2006年8月29日発行  
発行 国際音楽資料情報協会(IAML)日本支部  
〒106-0041 東京都港区麻布台1-8-14  
日本近代音楽館気付  
<http://www.iaml.jp>